

【研究ノート】

# 「見かけ上のエンテュメーマのトポス」考

----- アリストテレス『弁論術』1400b34 - 1400a29 -----

野津 悌

（序）

筆者は、拙論「「エンテュメーマのトポス」考 -----アリストテレス『弁論術』1397a7-1400b33-----」（『国士館哲学』第九号、平成17年3月発行、6頁～26頁）において、アリストテレスが『弁論術』2巻23章中に列挙している28例の「エンテュメーマのトポス」を分析することにより、この種のトポスが〈言論を用いて聞き手を説得しようとする諸行為〉を意味するものであることを示し、この種のトポスが〈論点〉というよりはむしろ〈論法〉と訳すべきものであると論じた。

アリストテレスは『弁論術』2巻23章で「エンテュメーマのトポス」の28例を列挙した後、引き続き同書2巻24章において「見かけ上のエンテュメーマのトポス」（以下、偽りのエンテュメーマの源となるトポスとの意味を込め、便宜上〈偽トポス〉と呼ぶ）の9例を列挙している。これら9例が列挙される箇所は以下の通りである。偽トポス1(1401a1-23)、偽トポス2(1401a24-b3)、偽トポス3(1401b3-9)、偽トポス4(1401b9-14)、偽トポス5(1401b15-21)、偽トポス6(1401b21-29)、偽トポス7(1401b29-34)、偽トポス8(1401b34-1402a2)、偽トポス9(1402a2-29)。本来「エンテュメーマのトポス」の性格を明らかにするためには、2巻23章における「エンテュメーマのトポス」の28例のみならず、これら9例の「見かけ上のエンテュメーマのトポス」にも同様の分析を施すべきであったが、上掲拙論においては、紙幅の都合のため、それを割愛せざるを得なかった。拙稿はこの不備を補うことを目的とする研究ノートである。

拙稿における結論をあらかじめ示すと次のようになる。9例の「見かけ上のエンテュメーマのトポス」もまた27例の「エンテュメーマのトポス」の場合と全く同様に、記述される際の形態に着目して3つのタイプに分類しう

る。第1のタイプは、偽トポスが〈動詞の不定詞形〉で表現されている場合である。このタイプに属する偽トポスは〈～と語ること〉と訳すことができ、それが〈論法〉であることを端的に示している。第2のタイプは、偽トポスが〈目的手段連関を示す前置詞と名詞〉で表現されている場合である。このタイプに属する偽トポスは直訳すれば〈～によるもの〉となる。しかし上掲拙論で示した如く（上掲拙論22～23頁を参照）、このタイプに属する偽トポスにおいては〈語ること〉に対応する何らかのギリシア語動詞（例えば、eipein, legein 等）の省略を想定すべきである。従ってこの第2のタイプの偽トポスもまた〈～によって語ること〉であることになり、最終的には第1のタイプに還元される。第3のタイプは、偽トポスが〈何らかの同一性を示す前置詞と名詞〉で表現されている場合である。例えば ①〈自転車によって通勤する〉と ②〈自転車を漕ぐことによって通勤する〉を比較した場合、〈～によって〉という同じ前置詞が、①においては〈通勤する〉という目的と〈自転車〉という手段との連関（目的手段連関）を意味しているのに対して、②においては〈通勤する〉という目的と〈自転車を漕ぐ〉という行為との間の連関（何らかの同一性）を意味している。偽トポスが〈何らかの同一性を示す前置詞と名詞〉で表現されている場合というのは、要するに、〈～によって〉を意味するギリシア語の前置詞が上述の②のような意味で用いられている場合である。この第3のタイプに属する偽トポスもまた直訳すれば〈～によるもの〉となる。しかし、第2のタイプに属する偽トポスの場合と同様、この第3のタイプのそれもまた〈語ること〉に対応する何らかのギリシア語動詞の省略を想定すべきである。従って、この第3のタイプの偽トポスは〈～することによって語ること〉（あるいは〈～しつつ語ること〉）であることになり、これもまた最終的に第1のタイプに還元される。

拙稿においては、以上の点を原典からの訳出引用を通じて示すものである。原典は上掲拙論と同様、Kassel 校訂のテキスト (*Aristoteles Ars Rhetorica*, ed. Kassel, Berlin, 1976) を使用する。訳文中の [ ] 内の語句、及び①②③等の番号は、筆者が挿入したものである。また、拙稿の本文および訳文中でしばしば用いた〈 〉は一まとまりの語句であることを明示するために用いたものである。なお、上述の拙論においては2巻23章中のトポス28例の定義にあたる部分だけを抜き出して訳出引用し、各々のトポスの運用例

の訳出は割愛した。これに対し、拙稿においては2巻24章中の偽トポス9例に関するテキスト全体を訳出する。従って拙稿には24章全体の日本語訳が含まれている。ただし拙稿においては偽トポス9例をタイプ別に分類した上で訳出引用しているので、それらを引用する順序は実際のテキストにおける順序とは異なっている。

（1）〈動詞の不定形〉で表現される偽トポス

第1のタイプに属するものは、偽トポス2及び3である。それぞれのトポスは〈～と語ること〉のように動詞の不定詞形で表現されている（訳文の太字部分を参照）。

偽トポス2（1401a24-b3）：

【和訳】別のトポスは、**分割されたものを結合して語ること、あるいは、一緒になっているものを分割して語ること**である。実際、同一事でないことがしばしば同一事であるように思われる場合には、どちらなりとも一層有利である方を用いるべきである。

例えばエウテュデーモスの言論がこれである。彼は「ペイライエウスに三段櫓船があること」を自分は知っているという。何故なら自分はそのことも<sup>(1)</sup>知っているからというわけである。

また、字母を知っている者に関して「彼は語を知っている。何故なら語は字母と同一であるから」ということ。

また「二倍の量が体に悪いのである以上、もとの量もまた体に善くはない。なぜなら二つの善いものが一つの悪いものになるとしたら、それは不合理だからである」と語ること。なお以上のようなやり方では論駁的な議論となるが<sup>(2)</sup>、次のようなやり方では論証的な議論<sup>(3)</sup>となる。

「一つであれば善であり二つであれば悪であるということはないからである」。もっともこのトポスは全体として<sup>(4)</sup>誤謬推理を導くものである。

また、ポリュクラテースのトラシュブローロスについての「彼は三十人の専制君主たちを倒した」という言葉もそうである。なぜなら彼は結合しているからである<sup>(5)</sup>。

あるいはテオデクテース作の『オレステース』における次の言論もそうである。何故ならそれは分割によるものだからである。「夫を殺すような女が死ぬことも、息子が父親の仇を討つことも、正しいことである。そして、これらのことが実行されたのである」。実際それらが結合されるとそれはもはや正しいことではないだろう。なおこの言論は〈省略によるもの〉でもあるだろう。[この言論の語り手は]「誰によってか」を取り除いているからである。

【訳注】<sup>(1)</sup>「ペイライエウスに」ということ並びに「三段櫓船」ということ。

<sup>(2)</sup>「二倍の量は体に悪いけれども、もとの量は体に良い」という主張を論駁する議論であるという意味。<sup>(3)</sup>「もとの量が体に良いならば、二倍の量も体に良い」という主張を論証する議論であるという意味。<sup>(4)</sup>論駁的に用いられても、論証的に用いられても、ということ。<sup>(5)</sup>つまり三十人政権という一つのことを三十人の専制君主たちへと分割した上で結合しているということ。

なお、ここでアリストテレスが紹介しているテオデクテースの言論は「分割されたものを結合して語ること、あるいは、一緒になっているものを分割して語ること」（偽トポス2）の適用例であり、このトポスは形態上、第1のタイプに属する。ところがアリストテレスがこの同じテオデクテースの言論を「分割によるもの *ek diaireseōs*」とも「省略によるもの *para tēn elleipsisin*」（「省略によるもの」については偽トポス8を参照）とも呼んでいることには注意を要する。「分割によるもの」「省略によるもの」は、形態上、第3のタイプに属するものだからである。このことが意味しているのは、アリストテレスが同一のトポスを、第1のタイプと第3のタイプの両形態を用いて記述しているということである。

偽トポス3（1401b3-9）：

【和訳】別のトポスは、誇張によりある主張を支持したり覆したりすることである。[誰それがある事柄を]行っただけということを証明することをせずにその事柄を大袈裟に語るような場合がこれにあたる。実際、告発された側が[その事柄を]大げさに語るならば自分がそれをなしてはいないかのように見せかけることになるし、告発する側がそのように語るならば<sup>(1)</sup>告発された側がそれをなしたかのように思わせることができるの

## 「見かけ上のエンテュメーマのトポス」考（野津）

である。これはエンテュメーマではない。何故なら、聞き手は、「どちらの主張も」証明されていないのに、「彼はなした」あるいは「彼はなさなかった」という誤謬推理を行うからである。

【訳注】<sup>(1)</sup>Kassel に従い写本の *orsêi* を後世の加筆とみなしこれを読まない。

### （２）〈目的手段連関を示す前置詞と名詞〉で表現される偽トポス

第２のタイプに属するものは、偽トポス１，４，５，６，９である。これらにおいては諸トポスの定義が〈～によるもの〉という形態で表現されている。

偽トポス１（1401a1-23）：

【和訳】見かけ上のエンテュメーマにも諸々のトポスがあり、ひとつは**表現によるもの**である。

①〔表現によるものの〕ひとつの種類は、弁証術の場合に、推論によって結論づけられていないことを「従ってこれこれではない」とか「従って必然的にこれこれである」というように推論の結論であるかの如く述べるのと同様のことであって、エンテュメーマの場合にも**簡潔かつ対照的な**<sup>(1)</sup>**仕方**で述べるのがエンテュメーマの見せかけを持つ。このような表現こそエンテュメーマの領分だからである。このような見せかけは表現の形態から生じるように思われる。また、表現上推論めかして語るためには、数多くの推論の主要部分<sup>(2)</sup>を並べて述べるのが有用である。「彼は彼らを救出した。彼は他の人々の仇を討った。そして彼はギリシア人たちを自由にした」のように。これらの言明の各々はそれぞれ別々の推論により証明されたものなのであるけれども、これらの言明が組み合わされたとき、これらの言明からもまた何らかの言明が帰結しているかのように見えるのである。

②また〔表現によるものの〕もうひとつ〔の種類〕は**同音異義語によるもの**であり、次のように述べる場合である。「鼠 *mys* は優れたものである。全ての宗教儀式のうちの最も尊いものがそれに由来しているからである。何故なら、秘儀 *mystêria* は最も尊い宗教儀式なのであるから」。また誰かが、犬 *kyôn* を称賛しようとして、天上の犬〔星座シリウスのこと〕

を引き合いに出すような場合、あるいはピンダロスが〔パーン神について〕「おお至福なるものよ。オリンピアの神々が、偉大なる女神のしもべ、様々な姿形を取る犬と呼ぶものよ」と言ったことからパーン神を引き合いに出すような場合、あるいは「犬一匹いない」ということは非常に不名誉なことであるので<sup>(3)</sup>犬は明らかに尊重すべきものである〔と述べるような場合〕、である。また、ただヘルメスだけが〈共有のお方 koinos <sup>(4)</sup>〉と呼ばれていることから、ヘルメスを神々の中で最も社交的な者 koinōnikos と述べること。また、善き人々は金ではなく言及 logos に値する<sup>(5)</sup>という事を理由に「言葉 logos は最も立派なものである」と述べるような場合である。実際〈ロゴスに値する〉という言葉の意味は一通りではないのである。

【訳注】<sup>(1)</sup> この「対照的な antikeimenōs」語り方をアリストテレスは『弁論術』3巻9章1409b32-10a22 で取り上げている。<sup>(2)</sup> 「推論の主要部分 syllogismōn kephalaia」とは〈推論の結論〉の意味である。<sup>(3)</sup> Kennedy(1991)の訳注にあるように「犬」は〈従者〉の隠喩とみなしうる。<sup>(4)</sup> ヘルメスは幸運の神であると考えられていたことから、誰かが拾い物をした時、人々は「共有のお方ヘルメス koinos Hermēs」と叫んで分け前を要求したとされる（Kennedy 及び戸塚の訳注参照）。<sup>(5)</sup> 「言及に値する」とは〈賞賛に値する〉という程の意味である。

なお、この偽トポス1は「表現によるもの」という記述のもとでは、形態上、第2のタイプに属する。しかしアリストテレスがその内容として①「簡潔かつ対照的な仕方ですべてを述べること」と②「同音異義語によるもの」という二つの種類を挙げていることは注目に値する。これらのうちの①は形態上第1のタイプのトポスだからである。このこともまた第1のタイプと第2のタイプとの相違が単なる記述の上での違いであることを示している。

偽トポス4(1401b9-14)：

【和訳】別のトポスは**徴証によるもの**である。実際、これもまた推論ではない。例えば、誰かが「恋人たちはポリスにとって有益である。というのはハルモディオスとアリストゲイトンの恋が僭主ヒッパルコスを倒したからである」と述べるような場合。あるいは、誰かが「ディオニュ

シオスは盗人である。というのは彼は悪人であるから」と述べるような場合も同様である。実際これは推論ではない。全ての盗人は悪人であるが、全ての悪人が盗人ではないからである。

偽トポス 5 (1401b15-21) :

【和訳】別のトポスは付随的事態によるものである。ポリュクラテースがネズミたちについて「彼らは弓を齧り尽くすことにより人を助けた」<sup>(1)</sup>と述べているのがその一例である。あるいは、誰かが「夕食に招かれることは最も荣誉あることである。実際、アキレウスがテネドスでアカイア人らに激怒したのは〔彼が夕食に〕招かれなかったせいなのである」と述べるような場合である。彼は軽視を理由として激怒したのであるが、そのような軽視が〔彼が夕食に〕招かれなかったという事態に付随していただけなのである。

【訳注】<sup>(1)</sup> 敵が、弓矢の弦をネズミの群れにより齧り尽くされて、戦闘不能に陥るような事態である。ヘロドトス (*Historiae* 2, 141) がそのような例を記録している。

偽トポス 6 (1401b21-29) :

【和訳】別のトポスは結果によるものである。

『アレクサンドロス』<sup>(1)</sup> 中の「アレクサンドロスは高邁である。彼は多くの人々との交際を軽視してイデ山中で一人きりで暮らしていたからである」というものがその一例である。高邁な人々というのはそのような人々なのであるから、この人もまた高邁であるように思われる可能性があるのである。

また「彼は着飾って夜中にうろついているから、姦夫である。姦夫とはそのような人々であるから」というもの。

また「乞食たちは神殿で歌ったり踊ったりしている」あるいは「逃亡者たちは自分たちの望む所で暮らすことができる」というのも同様である。幸福であると思われる人々にはこれらのことがあてはまるのであるから、これらのことがあてはまる人々は幸福であると思われる可能性があるのである。しかし「いかなる仕方でも」という点において異なる

のである<sup>(2)</sup>。ゆえにこのトポスもまた〈省略<sup>(3)</sup>〉に属するものである。

【訳注】<sup>(1)</sup> あるソフィストの手になる、トロイ戦争の原因をなしたパリス（アレクサンドロス）の称賛を試みた演示的弁論のことであると推定されている。（Kennedy 195頁）<sup>(2)</sup> 例えば、乞食が「歌ったり踊ったり」するのは物乞いのためであって楽しみのためではないし、逃亡者たちが「自分たちの望む所で暮らすことができる」のは余儀なくされてのことであり当人の自由意志によるものではない。<sup>(3)</sup> 「いかなる仕方で」という観点の省略のことである。また〈省略〉は〈省略によるもの〉の意（偽トポス8を参照）。

偽トポス9（1402a2-29）：

【和訳】また争論的議論において〈端的にこれこれであり、かつ、端的にではなくある意味でこれこれであると語られること〉によって見かけ上の推論が生じる。弁証術における「〈あらぬもの〉は〈あるもの〉である。なぜなら〈あらぬもの〉は〈あらぬもの〉で〈ある〉からである」「知りえないものは認識しうるものである。なぜなら、知りえないものについてそれが知りえないものであるということを認識しうるからである」というのがその例である。これとちょうど同じように、弁論術においても端的な意味でではなくある意味での〈ありそうなこと〉によって見かけ上のエンテュメーマが生じる。ある意味での〈ありそうなこと〉は普遍的に〈ありそうなこと〉ではない。ちょうどアガトンもまた次のように述べている。

死すべき者どものもとでは多くの〈ありそうでないこと〉が起こるということ、まさにこのことこそ〈ありそうなこと〉であると言うことができるだろう。

実際、〈ありそうなこと〉に反する何かが起こるものであり、その結果、〈ありそうなことに反すること〉もまた〈ありそうなこと〉であることになる。そしてもしそうであるとしたら〈ありそうではないこと〉が〈ありそうなこと〉であることになる。しかしこれは端的な意味での〈ありそうなこと〉ではない。ちょうど争論的推論の場合に〈何に関して〉〈何に対して〉〈如何なる仕方で〉ということが規定されていない言論



が詭弁を作り出しているのと同じように、〈ありそうなこと〉が〈端的な意味でのありそうなこと〉ではなく〈ある意味でのありそうなこと〉でしかないことによって〔見かけ上のエンテュメーマが生じて〕いるのである。

ところでコラクスの技術はこのトポスから構成されている。咎めを受けがちではない場合、例えば非力な者が暴行の罪で訴えられているような場合には、「そのようなことはありそうなことではない」と述べ、また〔咎めを〕受けがちである場合、例えば力の強い者が〔暴行の罪で訴えられているような場合には〕「そのようなことはありそうなことではない。というのは、ありそうなことだと思われることが予想されていたからである」と述べるのがその例である。他の事柄に関しても同様である。実際、必然的に、咎めを受けがちであるか、受けがちではないかのどちらかだからである。そしてこの両方が〈ありそうなこと<sup>(1)</sup>〉であるような見かけを持つのではあるが、一方が〈ありそうなこと〉であるのに対して、他方は〈端的な意味でのではなく、言われている限りの意味での、ありそうなこと〉である。また弱論を強弁するとはこのことなのである。そしてこのことからして、人々は正当にも、プロタゴラスの公言<sup>(2)</sup>を苦々しく感じたのである。何故ならそのようなことは虚偽であり、真ではなく見かけ上の〈ありそうなこと〉であり、弁論術と争論術を除くいかなる技術のうちにも属さないものだからである。

【訳注】<sup>(1)</sup> つまり〈端的な意味でありそうなこと〉の意。<sup>(2)</sup> 例えば、ディオゲネス・ラエルティオスの「〔プロタゴラスは〕あらゆる事柄には互いに対立する二つの言論があると初めて述べた」という証言を参照（Diog. ix 51）。

（３）〈何らかの同一性を示す前置詞と名詞〉で表現される偽トポス

第３のタイプに属するものは、偽トポス ７，８である。それぞれのトポスの定義にあたる部分は〈～することによるもの〉という形態で表現されている。

偽トポス ７（1401b29-34）：

【和訳】別のトポスは**非原因を原因と**〔**みなすこと**〕によるものである。

## 「見かけ上のエンテュメーマのトポス」考（野津）

〔非原因とは〕例えば「〈同時に〉あるいは〈その後に〉生じたということ」である。実際人々は、とりわけ政治に携わっている人々は、〈その後に〉を〈それ故に〉とみなすのである。例えばデマデースが「デーモステネースの政策があらゆる悪の根源である。その後に戦争が生じたのであるから」と述べたように。

偽トポス 8（1401b34-1402a2）：

【和訳】別のトポスは「いつ」と「いかに」の省略によるものである。例えば「アレクサンドロスがヘレネを奪ったのは正当であった。彼女には父親から〔夫を〕選択する権利が与えられていたからである」というものである。しかしおそらくそれは「いつも」ではなく「最初だけ」である。父親が主権を持っているのはその時点までだからである。また「自由人を殴ることは不法行為である」という場合。何故なら、それはあらゆる場合のことではなく、不正を加えようとして先に手を出す場合のことだからである。

### （結語）

以上訳出引用したテキストに見られるように、偽トポスもまたその形態上三つのタイプに分かれる。しかしこれらの三つのタイプの間の相違は、それぞれのトポスを記述しようとする際の便宜に由来するものであり、実質的な相違ではない。「見かけ上のエンテュメーマのトポス」もまた、「エンテュメーマのトポス」と同様、最終的には第1のタイプ、すなわち〈～と語ること〉という〈動詞の不定詞形〉に還元しうる。このことは、この種のトポスもまた〈論点〉と訳すよりは〈論法〉と訳すべきものであるということを示している。

### 参考文献

Kennedy; *Aristotle, On Rhetoric*, 1991, Oxford

アリストテレス『弁論術』（戸塚七郎訳）1992 岩波文庫